

小学校英語の授業の充実を図る現場研修の方法を探る

～研究最終年の報告～

1 キーワード

小学校英語

- ・子どもの“できる感”
- ・「話すこと〈やり取り〉」と4技能の習熟
- ・指導者の気づき
- ・5領域(4技能)の統合的指導
- ・現場研修の必要性

2 研究概要

本研究は、2017年4月から2020年3月まで3年間にわたる指導者の授業づくりの観点の変容、そして、子どもの英語の学びに対する「自信度（できる感）」と「英検 Jr.学校版の結果」の変容をまとめている。その得られた数値の分析により、小学校英語の授業改善のために現場研修や授業訪問を継続的に行う必要性、及び、新たに「文字を伴うやり取りの授業づくり」の有効性も見えてきた。また、子どもの「自信度」と「英検 Jr.学校版の結果」には相関が見られ、自信度の高い子どもは、英検 Jr.学校版での結果も良好であることが3年間を通じて大きく変わらないことも明確となった。

しかし、全体的に3年間、文字を「読むこと」に関わる部分についての子どもの「自信度」が低いままであったが、2年間継続的に授業改善に取り組んだ連携校の6年生の結果には、大きな違いが見られた。特に顕著な変化は、“できる度 Check”の項目22・23・24であり、2018年度の連携校の5年生の自信度は他よりも一番低いところであったが、2年後の2019年度の6年生の時には大きく伸びている。しかし、連携校以外の子どもたちは、大きな変化が見られないことから、文字を扱った学習の改善は、子どもにとって、英語を「読むこと」に対する自信を高めることにつながる結果となったと考えている。このことから、今後は、文字化された単語や文を見ながら進める授業づくりで、子どもの学びを効果的に促す指導改善の方途に関わる研究が必要であることを示唆していると考えている。

3 ◎主担当・共同研究者

氏名	所属
◎ 久埜 百合	中部学院大学 学事顧問
片桐 多恵子	中部学院大学 短期大学部 学長
新井 謙司	中部学院大学 教育学部 准教授 高山市教育委員会 小学校英語総合カリキュラム・マネージャー
服部 吉彦	中部学院大学 教育学部 教授
加藤 誠昭	高山市教育委員会 小学校英語総合カリキュラム・マネージャー

本研究の初年度であった2017年度の英検 Jr.学校版の受検者数は885名、2018年度は、1760名と大幅に増加した。3年目の2019年度は予算の関係上、1386名が受検したが、当初の希望者数は1684名であった。このような受検者数の急激な増加と3年目も2年目とほぼ同様の規模の受検者数で継続的に実施することができたのも、研究のフィールドとして高山市教育委員会と高山市立小学校並びに、白川町立白川郷学園（義務教育学校）、各務原市立尾

崎小学校の協力、そして、久埜百合を中心とした研修や学校訪問の地道な取り組みにより、現場の教職員の意識の中に、小学校段階における英語の授業改善の推進基盤がうまれつつあることが要因の1つではないかと考えている。

2019年度の最終月の3月は、コロナ感染症対策のため、突如として学校現場が休校となったが、英検 Jr.学校版は、すでに2月当初に受検済みであったため、予定通りに2019年度最終的な英検 Jr.学校版の結果報告を得ることができ、研究資料として使えるようになった。ただし、結果の分析研究の作業が2020年度の新たな研究内容の開始に関わる学校間との話し合いや休校後の授業づくりの支援、そして、コロナ感染症対策等と重なり、報告が大変遅れてしまったことは残念であった。

4 2019年度の研修・連携学校への訪問等の実績

すでに2019年度に向けて研修・学校訪問・勉強会その他の予定を組み始めており、授業づくり連携協力校については本年度より新規で2校増え、7校（各務原市立尾崎小学校・高山市立東小学校・花里小学校・清見小学校・丹生川小学校・本郷小学校・白川郷学園）が参加。4月から特に、新規の連携協力校を中心として活動を開始している。また、白川郷学園については、12月に公表会を控えていたため、小学1年～中学3年までの9年間の「学習到達目標」と「年間指導計画」の整備を共同で進めた。

2019年3月：中部学院大学「授業づくり連携協力校7校」の設定

- 4月：5日(金) 高山市立丹生川小学校 職員研修
2017年度より継続している英検 Jr.学校版・意識調査・授業分析の整理
授業づくり連携校への授業支援・研修・教材の配布等の開始
ALT 現場実地研修の計画と ALT への周知
連携校訪問 高山市立花里小：2回
高山市立清見小：2回
高山市立本郷小：1回
高山市立丹生川小：2回
- 5月：21日(火) 白川村立白川郷学園3年生での模擬授業（久埜百合）
連携校訪問 高山市立花里小：2回
高山市立清見小：2回
高山市立本郷小：1回
高山市立丹生川小：3回
ALT 現場実地研修の開始（～12月）
- 6月：3日(月) 高山市立清見小学校にて模擬授業・授業参観（久埜百合）
4日(火) 白川村立白川郷学園9年間年間指導計画作成打合せ（久埜百合）
連携校訪問 高山市立花里小：2回
高山市立清見小：3回
高山市立丹生川小：3回
高山市立東小学校：1回
白川村立白川郷学園：2回
- 7月：29日(月) 高山市全域対象 小学校英語研修①（久埜百合）
30日(火) 各務原市全域対象 小学校英語研修②（久埜百合）
夏季休業前に、できる度 Check 1回目の実施予定（連携校のみ）
連携校訪問 高山市立花里小：1回
高山市立清見小：3回
高山市立丹生川小：1回
高山市立東小学校：1回

- 9月：6日(金) 職員研修 高山市立丹生川小
 17日(火) 白川村立白川郷学園 9年間年間指導計画作成打合せ (新井謙司)
 連携校訪問 高山市立花里小：2回
 高山市立清見小：2回
 高山市立丹生川小：4回
 白川村立白川郷学園：1回
- 10月：白川村立白川郷学園にて授業参観・年間カリキュラム最終打合せ
 高山市にて **English in Action Online** ミニ・ワークショップ① (久埜百合)
 連携校訪問 高山市立清見小：1回
- 11月：30日 中部学院大学「教育フォーラム2019」 会場：ぎふ清流文化プラザ
 連携校訪問 高山市立清見小：2回
 高山市立本郷小：2回
 白川村立白川郷学園：1回
- 12月：7日 白川村立白川郷学園にて公表会・研究会に参加
 高山市にて **English in Action Online** ミニ・ワークショップ② (久埜百合)
- 2月：26日 高山市全域悉皆研修 小学校英語研修③ (久埜百合)
 高山市にて **English in Action Online** ミニ・ワークショップ③ (久埜百合)
 “できる度 Check” 2回目・英検 Jr.学校版 **Bronze** 級/**Silver** 級の実施 (連携校・希望校)
 研究のまとめ

5 中部学院大学主催「教育フォーラム」について

中部学院大学「教育フォーラム2019」をぎふ清流プラザにて、2019年11月30日(土)に実施した。

- ・テーマ「子どもの言葉の学び方ってこうなんだ!! ～子どものあたまの中でまさに起こっていること～」
- ・プログラム
 - オープニング
 - ① 中部学院大学3年生 上田さんによる英語絵本の読み聞かせ
 - ② 中部学院大学3年生による総合表現発表 **Sound of Music**
 - 第1部 基調講演
 - 演題：「子どもの言葉の学び方 ～間違いの裏にある子どもの言葉の発達～」
 - 講師：広瀬 友紀先生 (東京大学大学院教授)
 - 第2部 ワークショップ
 - 講師：巽 徹 (岐阜大学 教育学部)
 - ：TPRの体験を通して
 - 山田 誠志 (文部科学省 初等・中等教育局)
 - ：Small Talkを通じた「指導」の在り方
 - 加藤コラゾン (中部学院大学 教育学部)
 - ：Foreign Language Acquisition: Interactive learning through stories, songs and rhythm
 - 久埜 百合 (中部学院大学 学事顧問)
 - ：やり甲斐のある「やり取り」の体験を通して
 - 第3部 シンポジウム
 - タイトル：「今だからこそ すべきことがある!! 小学校英語」

パネリスト： 巽 徹（岐阜大学 教育学部）
山田 誠志（文部科学省 初等・中等教育局）
加藤コラゾン（中部学院大学 教育学部）
久埜 百合（中部学院大学 学事顧問）
コーディネーター：新井 謙司（中部学院大学 教育学部）

2018年度同様、参加者は約200名があり、言葉の学びの本質に迫る討議を行うことができ、好評を得ることができた。その様子とアンケート結果は以下のURLでご覧いただけるようになっている。<https://www.chubu-gu.ac.jp/topics/2019/191225-01/>

6 2017年度～2019年度の3年間継続してきた意識調査“できる度 Check”について

本意識調査“できる度 Check”は、久埜・相田・入江（2011～2013）の研究において使用された、合計34の質問により構成されている小学生対象の意識調査*1である。その質問項目の構成内容は、執行間近の学習指導要領で大きく変えた5領域に組み込まれた4つの習得目標（聞く・読む・話す（やり取り）・話す（発表）・書く）に関わる項目がバランス良く配置されていると考えている。そのため、現段階での子どもの英語学習、英語の運用、そして、英語に対する主体的な学びに向かう意識を探ることができると考えられる。また、子どもが初見の英文に対してどのように対応しようとするかを見ることができ、指導者の普段の授業における指導方法や指導内容を子どもの自己評価の結果から垣間見ることができると考えている。このような理由により、中部学院大学「授業づくり連携協力校」を中心とした小学校において、2017年より継続的に本調査を採用し2019年度が最終学年として計画し実施してきた。

※1：質問項目の英文などは、当研究のために補正したものを使っている。

6.1 3年間の全体の意識調査“できる度 Check”の変容

6.1.1 教員の意識の変容

2017年からの3年間、小学校英語に関わり、教材のミニ・ワークショップも含め、延べ約20回の研修会の開催、久埜による延べ20回以上にわたる模擬授業の提示、共同研究者も含め高山市内小学校、白川郷学園、各務原市尾崎小学校での授業参観を3年間継続してきた。それらの研修や訪問を受けたり、模擬授業等で久埜の授業をつぶさに参観したり、“できる度 Check”や英検 Jr.学校版を実施した教師らから、以下の①～⑭の質問項目の回答を得てきた。

- ① できるだけ英語で授業をし、聞かせる英語は日本語で説明しない
- ② 子どもが推測しながら聞く力を付けられるよう、視聴覚教材を活用するなどして、まとまった英語を聞かせる
- ③ 英語らしいイントネーションやリズム、発音を身に付けられるようにする
- ④ アイコンタクトを意識し、大きな声で言ったり、ジェスチャーを使ったりして表現するように指導する
- ⑤ 子どもたちの発達段階に適した歌を選び、積極的に歌の指導を取り入れる
- ⑥ 聞いたり話したりすることをなるべく文字で目にふれられるようにしておく
- ⑦ 語彙をできるだけ増やす
- ⑧ 授業では先ず「本時の英語表現」の英文を板書する
- ⑨ 道案内など活動の場面を具体的に設定し、そこで使用する英語表現をあらかじめ決めて練習してから活動する
- ⑩ ペア・ワークやインタビュー等、子どもたち同士で行う活動を多く取り入れる
- ⑪ 他教科で学習した題材も活動に取り入れる
- ⑫ 年間指導計画を編成する際、英語の仕組みについて気づきを促すような指導順序を考慮する
- ⑬ 1コマの授業の中で、英語の文法的なルールに気づきやすい内容と順序で指導する
- ⑭ 母語による表現活動、読書指導などが英語活動に効果があると考え、母語の指導を重視する

図1の比較は、2017年度前期（一番最初の調査）、1年間研修等を実施してきた2017年度後期、そして、2019年度後期（一番最後の調査）を比較している。しかし、公立小学校の場合、人事異動や学年、担当の変更が毎年行われること、研修を受ける教員も同じ教員ではない場合が多く、研修等を受けた後の意識の変容を比較しようとする、2017年度内であっても、同じ母体・母数で比較することは困難となるため、図1の比較も必然的に違う教員母体・母数の結果比較となっている。しかし回答をした教員は、同一市内と中部学院大学との連携校であることから、他教員へのある程度の研修効果の波及は期待できると考えている。

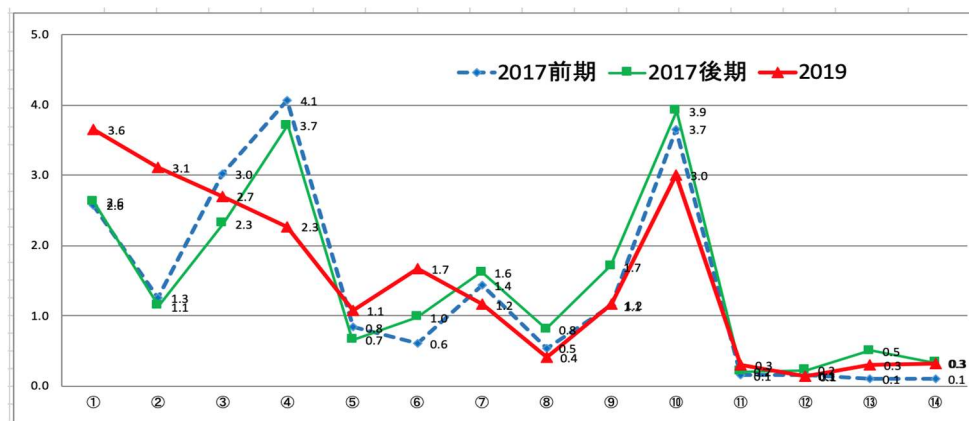


図1 2017年度前期・2017年度後期・2019年度後期の教員の意識変化

この図1において、大きな変化が見られる質問項目は、①・②・④・⑥・⑩である。

項目①・②の結果から、子どもたちに英語を聞かせる方法や子どもたちがどのようにして英語を聞き、理解していくのか、そして、英語を聞くことによるインプットの必要性を強く実感できる研修等を継続してきたことにより教員の意識が変容し、研修で学んだことを授業で実践したことにより、子どもの姿に変容を見いだすことができた教員が多くなってきているのではないかと考えられる。

項目⑥の結果から、文字を扱う方法や文字の存在が子どもたちの学びの定着に寄与する内容について研修で伝えたり、授業改善の助言を継続してきたことにより、これまでの音声のみでの英語のやり取りから、文字も含めた指導方法の広がりを見せつつ見せているのではないだろうか。これについては、2020年度の実践研究と関連する部分であるため、連携校を中心として指導者の意識の変容を継続的に追跡する必要があると考えている。

項目④と⑩の結果が下がっていることは、研修や授業改善の助言の効果を端的に示していると考えている。2000年前後からの小学校英語の高まりに伴い、授業内における評価基準は、態度面を基軸にしたものとなり、アイコンタクトや大きな声、ジェスチャーを使ったりした表現を強く求めてきた時代があった。しかし、それらが子どもたちの不自然なコミュニケーションの姿を生み出したり、英語らしいイントネーションや発音がおざなりになったり、無意味なジェスチャーが増えていくマイナス面も指摘されるようになった。本実践研究における久埜を中心とした研修では、子どもたちの言葉の発達段階に合わせた「子どもが自ら英語を使いたくなる」「子どもの心を動かす」ための指導方法等について研修を重ねてきており、不自然なことばの「やり取り」を生み出す指導目標や評価基準については検討が必要であることを伝えてきた。そのことにより、これまで現場では当たり前と思っていた指導方法の1つにメスを入れることができたのではないだろうか。さらに、項目⑩の結果から考えられることは、これまでペア活動ありきの授業スタイルから、項目①・②・③のところ十分に英語での「やり取り」を通して英語をインプットしていくことに重きが置かれるようになり、それを踏まえたペア活動を実施する教員が増えてきているのではないだろうか。このように項目④と⑩の結果から、2017年度以前までもっていた指導方法や指導方法に対する考え方の一部に風穴を開けることができた3年間となったのではないかと考えている。

項目⑪・⑫・⑬は、3年間変わらず低いままとなっている。これは使用する教材から影響を受ける場合が多いと考えている。採択教科書の使用が開始された2020年度から、この項目

がどのように変容していくのかについても継続的に調査が必要と思われる。

6.1.2 子どもの意識の変容

図2では、2017年度後期(889名)・2018年度後期(1084名)・2019年度後期(1407名)に実施した意識調査“できる度 Check”(岐阜県高山市周辺の小学校4・5・6年生)の全体結果の3年間の推移を比較している。図2は、同じ学校・児童の回答結果の比較を示しているものではない。意識調査“できる度 Check”(※注釈1参照)を7月・2月の年2回実施し、それを3年間継続してきた。図2の結果は、それぞれの年度の2月に実施した結果である。

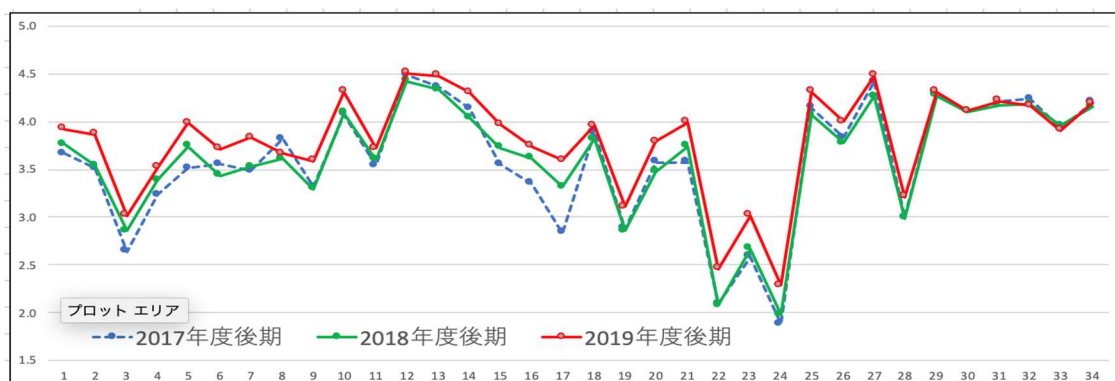


図2 “できる度 Check” 2017年度後期 vs 2018年度後期 vs 2019年度後期の比較

図2からもわかるように、34項目において、3年間ある程度の同じような線グラフの動きになっている。その中でも、項目5・7・9・14・16・17・20・21・22においては、特に大きな差を示していると考えている。項目29～34は、英語でのコミュニケーションに対する意欲の高さを3年間継続することができていることは、国際観光都市としての高山市の子どもたちや、世界文化遺産のある白川郷学園の子どもたちに期待したい大切な意識であることを考えると大変嬉しい結果である。

項目5は、「英語のヒントを聞いていくつかの絵の中から合うものを選ぶ」ことに自信があるかどうかについて質問する項目であるが、それが年々高まっていることから、図1の教師の意識調査の変容にも見られたように、英語での「やり取り」が授業内で増え、子どもたちがある程度の英語の文量に対しても理解をしながら対応できている、と感じていることを意味しているのではないかと推測される。

項目7・9は、語彙の知識について質問する項目であるが、身近な語彙(日付・曜日・身の回りの物等)の使用頻度が授業内で高まってきていることが推測される。

項目14・16は、相手に自分から質問したり、声をかけたりすることに対する自信度を表している。これらの項目の自信度の値が継続的に高まっていることから、授業内で英語を「使い合い」ながらの学びが実践されているのではないかと推測される。

項目17・20・21は、場面に応じて自分が言いたいことが言えるかどうかについての自信度を解いている項目である。そこが継続的に向上していることから、研修等でも伝えてきている「自分から言いたくなる言語活動」「子どもの心が動き出す言語活動」に関わるワークショップや授業づくりの助言が子どもの学び方に良い影響を与えている可能性がみられる。

項目22は、単語などの文字に対して、少しずつではあるが自信をつけてきている子どもが増えてきていることを示している。それは研修等でも伝えてきたように、指導者が文字を意識的に授業内で見せたり、扱ったりし始めていることが子どもの意識を少しずつ変化させているのではないかと推測される。また、項目22の歌の1行目を読めるか、項目24のflamingoに思い当たるところよりも、項目23の単語のみの読みでデータが低くなっていることを考えると、関係のない単語のSpellingを分かるかどうかを聞かれることの方が難しいと感じている可能性がある。これは、前後に情報があった方が、見慣れない語句に対しても、諦めずに推測し、意味を理解しようとしながら、「できる」気持ちになっていることを示している可能性がある。さらに、「読める」という気持ちの高い子どもたちにも同じ傾向が見られ、そして、さらに「読める」と自信のある子どもたちは、単語のSpellingに対しても、抵抗を感じていないことが見られる。しかし、依然として3年間もこれらの文字に対する自信度の数値が全

体的に低いままであることは、今後の指導法等の改善に早急に取り組まなければいけないことを示唆している。2020年度からの連携校における実践研究は、項目22～24の文字を「読む」部分に対する内容となっているため、今後の変容を継続的に見ていきたい。

6.1.3 年間の連携協力校内・外の子どもの意識の変容

ここでは、中部学院大学との「授業づくり連携協力校」内における子どもの意識の変容を“できる度 Check”の結果から見ることにする。「授業づくり連携協力校」は、本実践研究の2年目から発足し、初年度の2018年度は6校、2019年度は5校継続、2校新規追加で7校となった。そのため、ここでは2年間継続の5校内、2018年度5年生（216人）と2019年度（244人）の子どもたちの意識の変容を比較することにする。この5年生と6年生の有効回答のみを抽出しているため人数は変わっているが、母体は同じである。

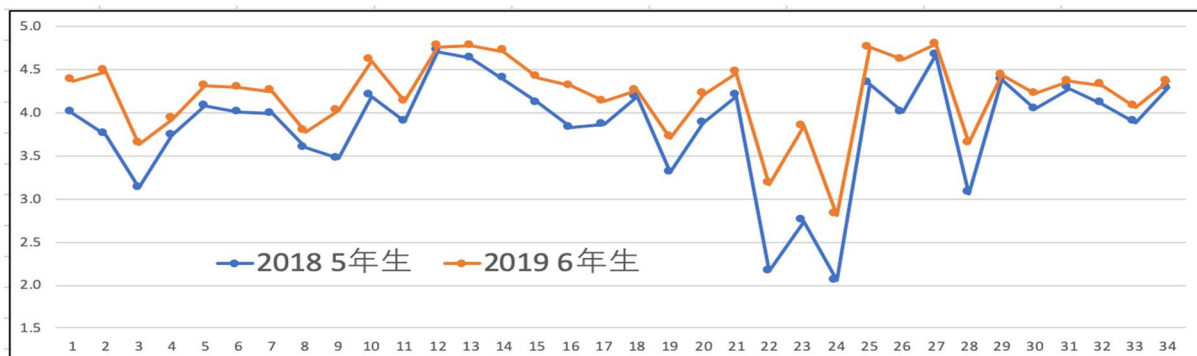


図3 連携校内（5校）の5年生から6年生への意識の変容

図3が示しているように、すべての項目において、1年後の6年生の“できる度 Check”の自信度は上がっている。特に、文字に関わる項目22・23・24は、授業内で明確に文字を扱う量が増え、指導をしていることが結果に現れてきていると考えられる。

それでは、連携校ではない学校内における2年間の子どもたちの意識の変容はどのようなものであろうか。例傾向以外の5校内で、2018年度5年生（289人）と2019年度（262人）の意識の変容が図4である。この5年生と6年生も母体は同じである。

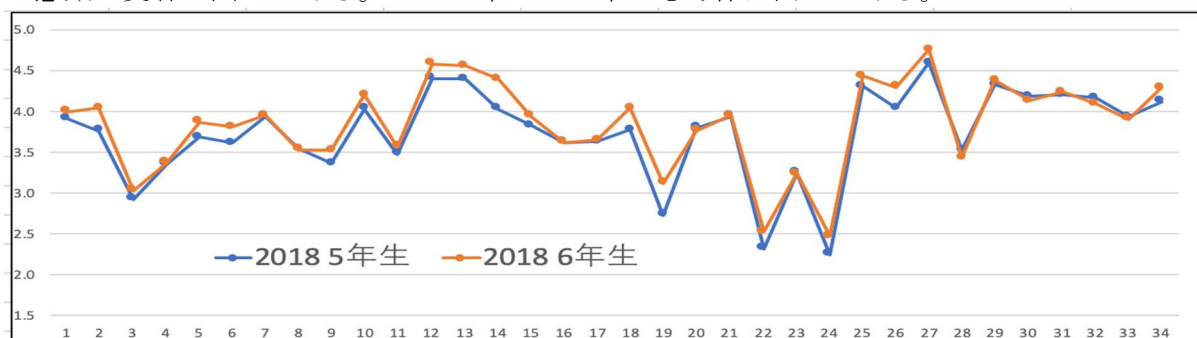


図4 連携校以外（5校）の5年生から6年生への意識の変容

図3と図4より、継続的、かつ、縦断的に学校訪問をし、授業参観や指導者との懇談、事前・事後指導を行うことにより、授業改善が進み、子どもたちの英語に対する自信度も変化していくことがわかる。逆の言い方をするならば、連携校以外の学校については、2年間の差があまり見られない、ということを示している。特に、文字を「読むこと」に関わる部分については、大きな違いが見られることが明らかとなった。

図5は、図3と図4を合わせたグラフである。図5から読み取れるように、2年間継続的に授業改善に取り組んだ連携校の6年生は、他と比べてほぼすべての項目において高い自信度の値を示している。特に顕著な変化は、項目22・23・24であり、2018年度の連携校の5年生の自信度は他よりも一番低いところにあったが、2年後の2019年度の6年生の時には、大きく伸びている。しかし、連携校以外の子どもたちは、大きな変化が見られないことから、

文字を扱った学習の改善は、子どもの英語を「読むこと」に対する自信度に大きな影響を与える可能性があることが示唆されている。

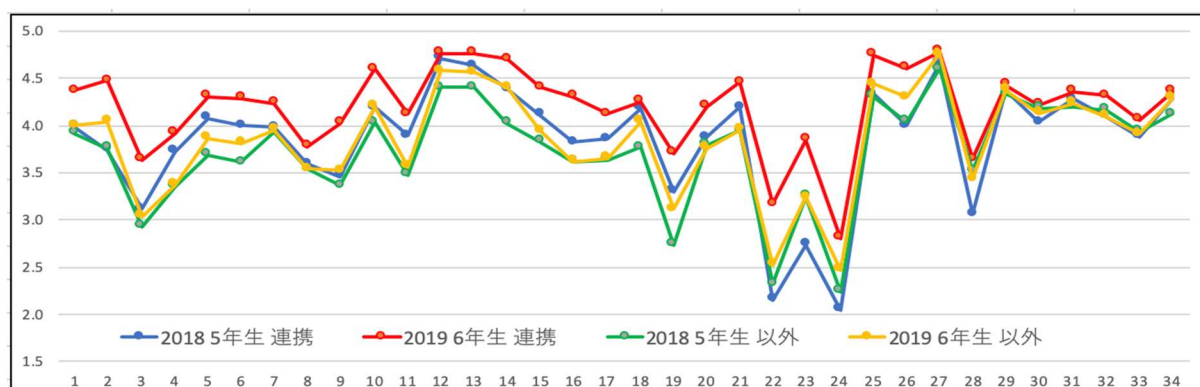


図5 連携校内（5校）と連携校外（5校）の5年生から6年生への意識の変容

7 2017年度～2019年度の3年間継続してきた英検 Jr.学校版の実施について

2017年度からの3年間、久埜による英検助成を利用し、中部学院大学と高山市教員委員会、白川村教育委員会、各務原教育委員会の理解のもと、2017年度は、Bronze級885名、2018年度は、Bronze級1147名・Silver級613名が受検し、合計1760名と増加した。2019年度は、予算の関係上、原則5・6年生に絞り、Bronze級651名・Silver級668名、合計1319名が受検をした。これも英検協会からの英検助成金を継続的に確保していただいた結果であり、また、小学校の現場も子どもたちの英語の学びを客観的なデータをもとにして把握したい、というニーズの高まりを感じる。また、英検 Jr.学校版は、同じ問題であるため、経年比較がしやすい、というメリットも小学校現場では感じとっているものと思われる。

7.1 英検 Jr.学校版の全体平均正答率の推移

まず3年間の英検 Jr.学校版 Bronze級の平均正答率の推移（3年生～5年生）、2年間の英検 Jr.学校版 Silver級の平均正答率の推移（6年生）を図6に示す。

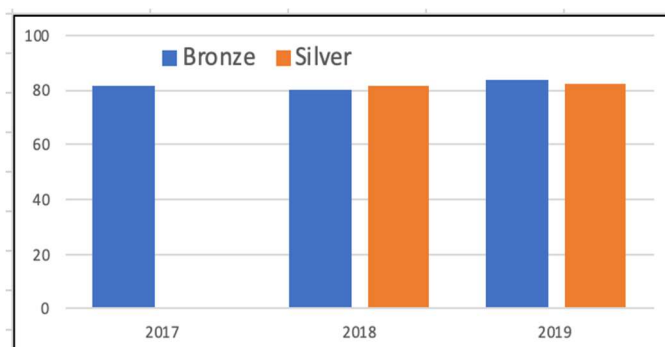


図6 Bronze級・Silver級の全体平均正答率の推移

図7は、Bronze級の3年間の分野ごとの平均正答率の推移である。

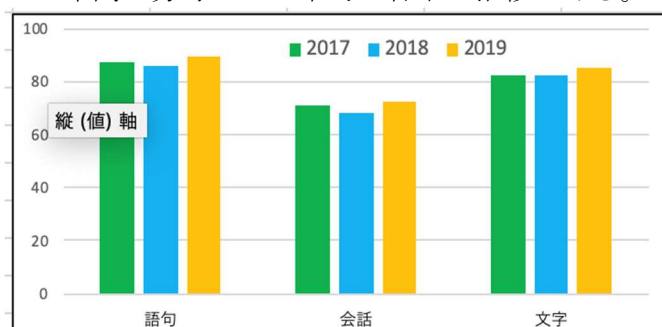


図 7 3年間の Bronze 級の分野毎の平均正答率の推移

図 8 は、Silver 級の 2 年間の分野ごとの平均正答率の推移である。

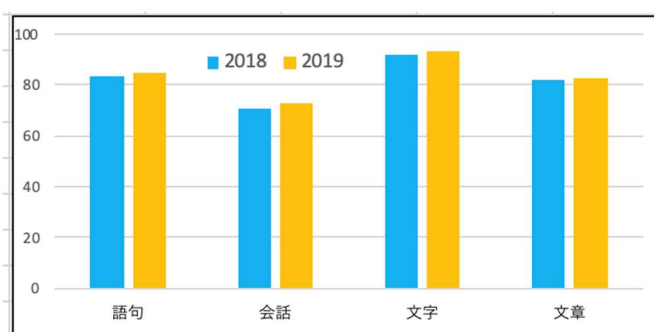


図 8 2年間の Silver 級の分野毎の平均正答率の推移

図 6・7・8 では、それぞれの年度や分野毎の差はあまり見られないが、どちらの級も「会話」の分野の正答率が低くなっていることは注意したいところである。また、文字に対する平均正答率が比較的高くなっていることから、今後の文字学習に対する準備段階まで来ている子どもが多くなってきていることが推測される。

7.2 2年間継続の連携校間（5校）の英検 Jr.学校版 Silver 級の平均正答率の比較

2.1 で示した図 6・7・8 では、違いがあまり見られなかったが、ここでは、2年間継続的に授業改善を進めてきた連携校内ではどのような平均正答率の推移を示しているかを示すことにする。また Bronze 級は、天井効果を示すことも考えられるため、Bronze 級を排除し、Silver 級に限定し表 1 に示すこととする。また、Silver 級を受検したのは、全員小学 6 年生である。

表 1 連携校間の英検 Jr.学校版 Silver 級の平均正答率

連携校	年度	平均	語句	会話	文字	文章
A校	2018	80.7	82.7	70.0	91.9	80.6
	2019	84.4	87.0	74.5	90.3	86.0
B校	2018	91.3	92.9	81.4	100.0	92.3
	2019	87.7	91.3	78.2	95.5	85.6
C校	2018	76.5	76.4	70.4	85.3	77.7
	2019	81.0	82.0	72.5	91.7	80.8
D校	2018	83.0	85.0	75.7	92.2	81.2
	2019	84.3	86.3	78.3	93.3	81.5
E校	2018	87.1	90.3	78.2	94.9	84.8
	2019	80.1	80.0	73.0	97.5	77.5

この表 1 から読み取れることは、5校のうち3校は、全体的に正答率（黄色のハイライト）が向上しており、残り2校は、全体的に正答率（青色のハイライト）が下がっている。これは、母体が異なるため、もともとの学力差や担任の変更による指導方法や指導観の差が影響している可能性も否定できないが、この表からはわからない。この点について、2020年度においては、英検 Jr.学校版の受験級をすべて Silver に統一していくことにより、同じ母体で経年比較が可能となると考えている。

さて、ここで注目したいことは、E校の文字の項目である。2019年度の項目毎の平均正答率は、大きく下がっているにもかかわらず、文字の部分だけが向上している。これはどのような要因が影響していると考えられるであろうか。E校の指導者からは、多くの教科において学力が伸び悩んでいる学習集団ではあるが、比較的、文字を見ることには慣れており、それは、6年生より一文字から読ませたり、短い単語から短文、文章と読ませる経験をさせたりしたことが良い影響を与えたのかもしれない、と伺った。実際に授業を参観したことがないため、具体的な文字の扱い方については推測するほか方法がないが、他の項目で

大きく差が見られるにも関わらず、文字の項目については、他校の結果よりも良いこと、そして、意識調査の“できる度 Check”においても、項目 22・23・24 の文字への自信度が高く、特に項目 23 の一単語に対する自信度が 4.2(5 段階)と大変高い。このことから、学習しなければ文字は読めるようにはならない、と言及する研究者も存在するが、E 校の 6 年生は、他校よりも文字に触れる機会に恵まれ、自ら英語の単語等を音声化してきた経験があるため、高い正答率となったのかもしれない。

7.3 連携校（7 校）と連携校外（8 校）の 2019 年度英検 Jr.学校版 Silver 級の平均正答率の比較

表 2 連携校（7 校）と連携校外（8 校）の平均正答率の比較

	平均	語句	会話	文字	文章
連携校	83.4	85.0	75.3	93.0	82.9
連携校外	81.3	83.3	70.9	92.1	80.9

表 2 では、2019 年度の連携校 7 校とそれ以外の 8 校の平均正答率を比較したものである。有意差がでるほどの差はあまり見られないが、すべての分野において、連携校が上回っている。ただし、連携校以外の学校の中には、連携校よりもよい正答率を出している学校があることから、この比較だけで、連携校の方がより授業改善が進んでいる、ということはいえない。

7.4 英検 Jr.学校版 Silver 級の受検校間の“できる度 Check”との関係

ここでは、“できる度 Check”の結果と英検 Jr.学校版 Silver 級との関係性について表 3 をもとにしながら分析することとする。そのため、2019 年度後期に“できる度 Check”の結果と英検 Jr.学校版 Silver 級を受けた学校のみ（2 年継続連携校: 5 校 1 年連携校: 2 校 連携校以外: 6 校）を取りあげる。また、“できる度 Check”の項目 29～34 のコミュニケーションに対する意欲の部分は、純粹の英語学習に関わる内容との比較をするために除外し、項目 1～28 の英語学習に関わる項目の結果の平均を取りあげることにする。

表 3 受検校間の“できる度 Check”と英検 Jr.学校版 Silver 級の結果順位表

	できる度	Silver		できる度	Silver	
E	4.4	80.1	→	B	4.1	87.7
k	4.3	80.4	→	A	4.2	84.4
A	4.2	84.4	→	D	4.2	84.3
D	4.2	84.3	→	F	4.0	83.5
B	4.1	87.7	→	l	3.9	83.4
C	4.0	81.0	→	G	3.5	82.8
F	4.0	83.5	→	h	4.0	82.6
m	4.0	78.2	→	C	4.0	81.0
h	4.0	82.6	→	k	4.3	80.4
l	3.9	83.4	→	E	4.4	80.1
j	3.7	76.7	→	i	3.6	79.9
i	3.6	79.9	→	m	4.0	78.2
G	3.5	82.8	→	j	3.7	76.7

表 3 の大文字 A・B・C・D・E は、表 1 の小学校と対応しており、2 年間継続の連携校であり、F と G は、2019 年度からの連携校である。小文字は連携校以外の小学校を示している。左の表は“できる度 Check”の結果を基準に平均の高い順に並べ、右の表は、英検 Jr.学校版 Silver 級の総合平均正答率の高い順に並べている。この表 3 から考えられることは、

- ① 2 年間継続の連携校の多くでは、G 以外は、意識調査において英語学習に自信を持ち始め

ていることを示した。しかし、G 小学校の子どもたちが、普段の授業から自分たちの学びに自信がもてない様子うかがえるため、授業内において「自分から考え、自分の言いたいことが言えた」「伝わった」「読める」等の自分たちの成長が実感できる授業内容や評価方法について改善する必要があると考えられる。

- ② 2年間継続の連携校の多くでは、授業改善が比較的順調に進むことができ、Silver 級において高い成績を収めることができた。
- ③ 過去 2 年間の調査結果では、“できる度 Check”が高い学校は、英検 Jr.学校版の成績も高い傾向が見られると結論づけてきたが、3年目の 2019 年度の結果からは、概ねこれまでの結果をサポートするものとなった。いくつかの学校の結果は、“できる度 Check”では低い値が出ているにも関わらず英検 Jr.学校版 Silver 級の正答率は高くなっていたり、“できる度 Check”では高い値が出ているが、英検 Jr.学校版 Silver 級の正答率に反映されていない場合も見られた。しかし、2年間継続の連携校の“できる度 Check”と英検 Jr.学校版 Silver 級は、概ね相関関係にあると言って良いのではないかと考えている。
- ④ 2年間継続の連携校の子どもたちは、“できる度 Check”は 4 回目、英検 Jr.学校版 Silver 級は 2 回目となる。そのため、意識調査についてより慎重に回答する傾向がみられるのかもしれない。
- ⑤ この比較は、あくまでも総合点による比較であり、それぞれの個々の項目間との関係性を見ていくと、異なる関係性が見えてくる可能性がある。

7.5 “できる度 Check”と英検 Jr.学校版 Silver 級の両方が高い結果を示した学校について

表 4 “できる度 Check”と英検 Jr.学校版 Silver 級の両方が高い結果を示した学校

	2018 年度 2019 年度 訪問回数	訪問方法	英語の取組体制	校内研究会 英語授業	指導者
A 小学校	年間 35 回	授業参観・模擬授業 指導者へ事後指導(JTE と 毎回行う)	他教科と同じ扱い	研修 2 回 授業研究 2 回	ALT JTE 担任
D 小学校	年間 16 回	授業参観・模擬授業 指導者へ事後指導(ALT・ 担任と毎回行う)	校内研究の 1 つ 全校体制	研修 2 回 授業研究 2 回	ALT 担任
B 小学校	年間 12 回	授業参観・模擬授業 指導者への事後指導 (ALT・担任と毎回行う)	校内研究の 1 つ 全校体制	研修 2 回 授業研究 2 回	ALT 担任

表 4 に取りあげた連携校は、それぞれ小学校英語の取り組み体制、指導者、訪問回数、訪問内容、校内研修の方法等において違いがある。表 4 は、2018 年度・2019 年度の 2 年間の実績である。

児童の英語学習に対する意欲や自信度は、指導者の授業改善の意識の変容からも影響を受けていると仮定するならば、定期的な授業参観、模擬授業、校内研修の実施を総合的、かつ、継続的に行っていくことが、指導者の意識の変容を押し進めていくと考えられる。さらに、A 小学校の訪問方法から、英語の授業づくりを牽引する指導者へのコンタクトを増やすことにより、授業改善が促進され、子どもの意識の変容にプラスの効果を与えているのではないかと推測できる。つまり、訪問回数が少なくても指導者へ直接コンタクトをとって事後指導を丁寧に繰り返し行うことにより、英語の授業改善の意識の変容が生まれやすくなると考えられる。このことから、本研究の「授業づくり連携協力校」の取り組みは英語の授業改善に有効に働いていると考えてよい。

7.6 表 4 の 3 つの小学校 (6 年生) の授業の共通項

表 4 の 3 つの小学校の 6 年生の授業スタイルや指導者の様子、指導方針等について共通項

を探ることとする。2019年度の1年間で、A 小学校の6年生の授業は14回、D 小学校の6年生の授業は2回、B 小学校の授業は4回参観することができた。その時の授業ビデオはないが、授業記録をたどると以下のような共通点が見えてくる。

- ① どの学校も ALT が授業内容について主導しているように見えるが、担任や JTE が ALT とよいバランスを保ちながら、授業展開を指示したり、方向付けをしたりしている。
- ② 定型パターン表現(あいさつ等)の時間はどこでも設定してあるが、その内容に沿って、話題を膨らませたり、話題に関係する質問をしたりしている。
- ③ 指導者が英語で子どもと、意味のある「やり取り」をしている時間 (Q & A・子どもに問いかけながらターゲットの表現等を聞かせる活動を含む) が必ず確保されている。
- ④ 授業内容が複雑ではなく、子どもの思考の流れが始めから最後まで一貫している。
- ⑤ 文字を扱う時間がある (文字を見せている・知っている単語を文字化している・文字から類推させて発音をしている等を含む)。
- ⑥ 授業の大半をできるだけ英語で展開できるようにしている。そのため、活動に関わる日本語での説明が少ない。
- ⑦ 子どもが自分の言いたいことを素直に言えることが受け入れられる環境である。
- ⑧ 確認のためだけに、ターゲットの表現を子どもにリピートさせる時間が少ない。

2018年度の報告では、指導者の子どもとの「やり取り」の時間数と質的な充実が子どもの英語学習の意欲だけでなく、英検 Jr.学校版の成績にも何らかの良い影響を与えていると結論づけた。詳しい授業分析と考察については、2018年度の報告を確認していただきたい。2018年度の報告書での授業分析の最後には、次のようにまとめた。

「英語を意味のある言葉として、子どもと「英語を使い合う」ことを大切にする指導観をもった指導者が授業を展開することも英検 Jr.学校版の結果に何らかの良い影響を与えているのではないか」

第3年目の2019年度に実施した“できる度 Check”や英検 Jr.学校版 Silver 級の結果、そして授業記録より、2018年度の報告書でまとめたことをさらにサポートする最終年度となったと考えている。

8 2020年度の研究の方向

2020年度は、コロナウイルス感染症への対策のため、6月初旬まで学校が休校となり、新たな学びの時代への対応を余儀なくされてきた。そのような中でも、中部学院大学の「授業づくり連携協力校 (2020年度は3校)」において授業訪問・勉強会、その他の取り組みを実施してきている。2020年度からの「授業づくり連携協力校」については、昨年からの継続の2校と新規1校でスタートした。また、2020年度からは、これまでの3年間の実践研究を土台として、「読むこと」に関わる実践研究を進めるよう計画してきた。すでに、第1回目の「文字クイズ (仮称)」を7月に実施済みである。第2回目は、2021年2月頃に実施予定である。

さらに、中部学院大学教育学部 教育フォーラム 2020 を以下の内容で開催予定である。

- ① 第1弾 12月5日 (土) オンライン (Zoom)
特設 HP <https://chubugakuinkyoku.wixsite.com/website-1>
講師: 久埜百合(中部学院大学)・佐藤明子(深谷市立深谷小学校)
- ② 第2弾 2月13日 (土) オンライン (Zoom)
特設 HP ※第1弾終了後に開設予定
講師: 山田誠志(文部科学省)・大場浩正(上越教育大学)・久埜百合(中部学院大学)

これまでの3年間の研修や授業訪問では、以下の表5の項目を一貫して伝えてきた。今後の研修や連携校においても同様に、小学校課程における子どもへの英語との出会わせ方の一

例として提案し続ける予定である。

表5 小学校英語に関わる研修・授業訪問・研究会における伝達項目

a: 「聞くこと」	真実味のある、かつ、英語のルールを守った語りかけで聞かせるようにすること。語りかけて、子どもが聞く量を多くすること。
b: 「読むこと」	文字を強いて読ませようとするのではなく、語順や語尾変化などに気づきが生まれやすいように印刷してある文字を子どもの目に触れるようにしておいたり、子どもが熟知している単語や句を指導者が板書して見せたりすることは、必要に応じて行うこと。
c: 「やり取り」	指導者は、子どもの実生活に即した内容を選んで、子どもが既に知っている単語を使って話しかけると、子どもは考えながら聞き、意欲的に自分で思いついたことを答えたいくなる。自然なやり取りで、英語を使い合う成功体験を重ねられるように仕向けながら指導する。指導者があらかじめ用意した対話を暗記させて、子ども同士で行う「やり取り」は避けること。
d: 「発表する」	子どもが言いたい、と思ったことについては、指導者が受け止めて、子どもの未熟な英語でも、励ましながら聞くように心がける。 子どもに覚えさせて複数の文で話す（発表する）ことはしないこと。
e: 「書くこと」	子どもの書きたい気持ちを尊重し、子どもが満足する程度をメドにして書く指導をする。子どもの「書きたい」という気持ちを尊重する。 子どもが言えることを書く、そして、書いたことを音読する、ということルールとしていること。

2020年度からは、2017年度～2019年度の“できる度 Check”の結果からもわかるように、文字を「読むこと」につながる指導内容等の検討が中心となる。もちろん上記のa～eを基本にしながら、bとeの項目について、児童の「できる度」の意識の高まりをつくる授業内容、指導方法等について実践を進める。そして、実践した授業を分析することにより、児童の英語力の伸張を促す授業改善のポイントをまとめ教育的示唆としたいと考えている。

【終わりに】

2017年度～2019年度の研究をまとめるにあたり、この研究によって、小学校の英語教育について、研究協力者一同が、さらに考え方を深められたことに、改めて厚く感謝を申し上げます。これも、日本英語検定協会の研究助成を得て、初めて可能になったことを感謝申し上げます。今年度も半ばを過ぎ、コロナウイルス感染症への対応に苦慮する中ではあるが、Zoomを利用したオンライン研修会や授業参観、研究会での指導などを継続し、子どもたちの英語の学びの充実に寄与できるよう努力したいと考えている。

9 資料（注釈 ※1）

“できる度 Check” 質問項目：久埜百合・相田眞喜子・入江潤(2011～2013)より

- 1A 名前や好きな色など、自分のことについて質問されたら何を聞かれたかわかる
- 1B 「本をひらきましょう」などと英語で指示されたらわかる
- 1C お話のあらすじを英語で聞いて何のお話かわかる
- 1D 先生と友だちが質問したり答えたりしているのを聞いて何を話しているかわかる
- 1E 英語の説明を聞いていくつかの絵の中から説明の内容と合うものを選べる
- 2A 1から100まで数えられる
- 2B 曜日や月の名前を言える
- 2C 歌を歌ったり詩を暗唱したりできる
- 2D 色、動物、食べ物、教室にあるものなど、身のまわりのものの言い方を英語で聞き取った

り、言ったりできる

2E アルファベットを順番通りに言える

2F アルファベットを英語の発音に気をつけて言える

3A 英語であいさつができる

3B 英語でお礼を言える

3C 英語で謝ることができる

3D 自分の好きなもの、好きではないものを英語で伝えられる

3E どの色が好きかなど好みについて質問できる

4A 欲しいものについて伝えられる

4B 先生やお友だちが自己紹介をしているのを聞いてわかる

4C 英語の言い方がわからないときにそれを英語で何というか質問できる

4D 自分の健康状態を伝えられる

4E 英語を聞き取れなかったとき「もう一度」とお願いできる

5A (示されている歌詞を見て) 知っている歌の歌詞が英語で書かれていたら何の歌かわかる

5B (8行の文章を見ると) 下の文章が何を説明しているのかわかる

5C (90語程度の文章を見ると) 誰のことについて書かれた文章かわかる

6A アルファベットの大文字を書ける

6B アルファベットの小文字を書ける

6C 自分の名前を書ける

6D 英語で「パンダ」と書ける

7A 英語のお話を聞いてもっと分かるようになりたい

7B 英語の歌をもっと歌えるようになりたい

7C 英語の本を自分でも読めるようになりたい

7D 世界のいろんな人たちと話せるようになりたい

7E 英語以外のことばも勉強してみたい

7F 自分の思いや考えを英語でも書けるようになりたい

